

大妻コタカと雑誌 —戦前・戦中の社会的活動—

Otsuma Kotaka and Magazine
—Social activities before and during the war—

高垣 佐和子¹, 井上 小百合², 井上 俊也³, 石井雅幸⁴
Sawako Takagaki¹, Sayuri Inoue², Toshiya Inoue³, and Masayuki Ishii⁴

¹大妻女子大学博物館大妻コタカ・大妻良馬研究所, ²一般財団法人大妻コタカ記念会,
³大妻女子大学キャリア教育センター, ⁴大妻女子大学家政学部児童学科

キーワード：大妻コタカ, 雑誌
Key words : Otsuma Kotaka, Magazine

1. 研究目的

大妻コタカは、明治から昭和にかけて女子教育の先駆者として活動し、教育の普及に寄与した人物である。明治 41 (1908) 年に家塾から始まった大妻コタカの学校では、「実学」を継続的に学ぶことが重視された。

大正・昭和期は女子教育が進んだことで識字率が上がり、婦人雑誌が登場し女性の重要な情報源となった。大妻コタカは、大妻学校での教育に加え、戦前・戦中に多くの雑誌に寄稿し、日常生活に役立つ礼儀作法や衣類・寝具の作成方法などの実用的な知識をわかりやすく伝えた。大妻コタカは雑誌を通じて学び続ける重要性を伝え、生活向上および婦人の修養に務めた。

さらに、大妻コタカの執筆は婦人雑誌に留まらず、男性が主たる読者の雑誌にも及んだ。テレビもインターネットもない時代の雑誌は、多くの人の思考・行動に大きな影響を与え、大妻コタカは現代風に言えばインフルエンサーのような存在であり、雑誌を通じて大衆に向けて生涯教育をしていたと言える。

本研究は、大妻コタカが学校の外で、雑誌を通じてどのような活動を行ったかを文献調査などにより検証することを目的とする。

2. 研究実施内容

大妻コタカが最初に雑誌に寄稿した大正 7 (1918) 年から太平洋戦争終結までの昭和 20 (1945) 年を対象期間として、文献資料調査を実施した。

調査対象は専門誌ではなく一般誌とし、執筆数の多い『婦人倶楽部』大日本雄弁講談社 (現・講談社), 『婦女界』婦女界社, 『主婦之友』主婦之友社, 『家の光』産業組合中央会 (現・一般社団法人家の光協会), 『キング』大日本雄弁講談社 (現・講談社), 『少女倶楽部』大日本雄弁講談社 (現・講談社), 『少年倶楽部』大日本雄弁講談社 (現・講談社), 『幼年倶楽部』大日本雄弁講談社 (現・講談社) の 8 誌を対象とした。

文献資料は、次の 3 期に分けて分析した。

I期：大正期 1918～1925 (大正 7～14) 年

II期：昭和初期 1926～1935 (昭和元～10) 年

III期：昭和中期 1936～1945 (昭和 11～20) 年

執筆内容については「手芸」「衣服 (和服・洋服・改良服)」「生活 (洗濯・寝具・健康・美容)」「修養」「礼儀作法」「結婚」「貯蓄・経済」ほかの項目に分け分析した。

3. まとめ

3.1. 調査結果

雑誌執筆内容とその特徴を時代別に記していく。

3.1.1. I期：大正期 1918～1925 (大正 7～14) 年

大正期は、婦人雑誌の創成期である。大妻コタカは創成期から手芸について多くの執筆をしている。

また、大正期は古い習慣の残っていた明治期から新しい昭和期へと変化する過渡期で、生活の内部にいくほど保守的な傾向が残り、居住環境を見れば玄関や座敷は改善されていたが台所や寝具

の発展は遅れ、服装については洋装が進んでも下着の発達には遅れていた。

大妻コタカが生活改善の遅れていた寝具や下着に関する執筆をしていることに注目したい。

3.1.1.1.「手芸」の内容から

大妻コタカは手芸に関する執筆が多いが、時代ごとに見ると大正期にその執筆が集中している。

大正期は娯楽が少なく、手芸は人気のある活動として注目されたこと、古い衣服を上手にリメイクする廃物利用としての提案が多くなされたことがその理由である。

大正期は政府が生活改善を促進し、廃物利用がその一環として行われ、材料の節約や再利用が小学校裁縫科の教育内容に反映された時代であった。

3.1.1.2.「裁縫（和服・洋服・改良服）」の内容から

大正期の日本では、和服が常用着であり、小学校の裁縫科でも和裁が必須であった。

大妻コタカは、女学校では習わない縮緬素材の扱い方、和服の仕立てや裁縫の上達法などを多数雑誌に掲載している。

3.1.1.3.「寝具」の内容から

大正期の大妻コタカは、衛生面を考えた「寝具」の提案を多数執筆している。

寝具の歴史を紐解くと、江戸時代の庶民は、四角い袋状の和紙や麻袋に藁くずを入れたものを寝具として使用していた。明治時代にインド綿が流入し、大正期になって一部の庶民にも綿布団が普及した。このように寝具の形状、素材が進化しても、綿の布団の衛生的な取り扱い方法は普及しておらず、大妻コタカは雑誌を通じて「衛生的な寝具の取り扱い」を提案し、生活改善に努めている。

3.1.2.Ⅱ期：昭和初期 1926～1935（昭和元～10）年

昭和初期は、世界恐慌や昭和恐慌の影響で失業者が増加し、都市労働者の生活が困窮し、農村部でも生糸価格の暴落により農業恐慌が発生し、都市部でも農村部でも人の暮らしは苦しくなった。

この時代の大妻コタカは、窮乏した生活の中で、衣服・洗濯・寝具・健康・美容など改善方法や、働く婦人に関する修養の記事を多数執筆した。

3.1.2.1.「生活改善」の内容から

『家の光』3巻12号（昭和2年12月）「衣類や夜具の繕い方」、『婦女界』42巻1号（昭和5年7月）「傷んだワイシャツの繕い方」においても関連の掲載がある。

そのほかの衣服の管理に関する執筆記事も多く、ビロード服や薄く柔らかい毛織物のメリンス、木

綿袴の洗濯方法についても詳しく記載されている。

また、和服の下に下着を着用することやその作り方について、生活改善・衣料改善を指南した記事も存在する。

3.1.2.2.「修養」の内容から

この時代は、世界的な不景気によって職業婦人が増加し、職業婦人と修養に関連する記事が多くなっている。

『婦人倶楽部』10巻8号（昭和4年8月）「職業婦人は奥様として何故好かれるのでしょうか嫌われるのでしょうか」では職業婦人に対する賛否についての意見が掲載され、大妻コタカは社会で磨かれた知識を得た職業婦人は、家庭でも満足な生活を送ることができるかと主張している。

3.1.3.Ⅲ期：昭和中期 1936～1945（昭和11～20）年

昭和6（1931）年の満州事変以降の戦時下において、日本の経済は統制され、被服に関しても国民服や標準服への導入、綿製品の禁止などの国策は国民生活に大きな影響を与えた。

昭和12（1937）年に日中戦争が始まると、生活の簡素化が提唱され、昭和13（1938）年には衣料切符制が導入されるなど、国民の生活に直接的な影響を与えた。また、毛や綿製品へのステープルファイバー（人造繊維）の混入も義務づけられた。

この時代の大妻コタカは、衣生活に関する多くの記事を執筆し、洋装の普及や衣生活環境の改善、被服教育に貢献し、服飾界で重要な存在となっていた。

3.1.3.1.「改良服」の内容から

古い伝統と習慣に縛られて進まなかった生活改善運動における洋装化・服装改善は、戦時下になり被服経済の合理化のため、国策として服装様式の検討がなされ、和服の改良が進められた。

『婦人倶楽部』19巻9号（昭和13年7月）「並巾一丈で出来る涼しい新案改良帯の作り方」では、涼しく格好が良く、仕立も簡単、衛生的で用布半分の改良帯の作り方が紹介されている。大妻コタカが考案したこの帯は後に「国策五尺帯」として広まった。

『家の光』15巻3号（昭和14年3月）「廃物利用でできる簡単帯づくり方五種」では、羽織や着物の廃物利用や風呂敷の活用、無地布への刺しゅう応用などを通じて、布地の経済的利用を重視し、見栄えの良い帯の作り方を5種類紹介している。

『婦人倶楽部』22巻11号(昭和16年11月)には「古い衣類の活用繰返し秘訣集」として、衣類をこまめに縫い直し、最終的には形を変えて再利用する方法が紹介されている。

昭和18年になると厚生省で制定した「乙型婦人標準服の作り方」が各婦人雑誌に掲載され、さらに『婦人倶楽部』24巻10号(昭和18年10月)「標準服(乙型)に仕立かえて残った袂(たもと)と衤(おくみ)の利用法22種」では、乙型標準服に仕立てた後の残り布を使った衣服のアイデアが紹介されている。

3.2. 文献資料調査

3.2.1.公益財団法人味の素の文化センター図書館(東京都港区高輪3-13-65)において令和6年9月12日に実施。

3.2.2.一般財団石川武美記念図書館(東京都千代田区神田駿河台2-9)において令和6年9月17日に実施。

3.2.3.昭和館図書室(東京都千代田区九段南1-6-1)において令和6年10月17日に実施。

3.2.4.公益財団法人日本近代文学館(東京都目黒区駒場4-3-55)において令和6年10月29日に実施。

3.2.5.公益財団法人阪急文化財団池田文庫・小林一三記念館(大阪府池田市建石町7)において令和6年11月12日に実施。

3.2.6.国立国会図書館(東京都千代田区永田町1-10-1)において令和6年11月13日・11月21日の2回実施。

3.3. まとめ

大妻コタカは、時代のニーズに応じて快適な生活を送るための重視した提案しており、大正期には寝具や下着の仕立て、廃物利用法、戦時中には改良服についての情報発信を行っている。

また、技芸学校の校長として、被服教育に多大な功績を残しただけでなく、社会においても、働く女性に向けた教養や修養に関する情報発信をした。

雑誌への執筆により、学外、特に地方の婦人も新しい知識や技術を得ることができ、実生活に役立つ情報がもたらされていた。雑誌における大妻コタカは、学校のある東京だけでなく、その他の地方でも重要な役割を果たしていた。

4. この助成による発表論文等

今後研究成果がまとまり次第、発表・投稿予定である。

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2409)「大妻コタカと雑誌―戦前・戦中の社会的活動―」を受けたものである。